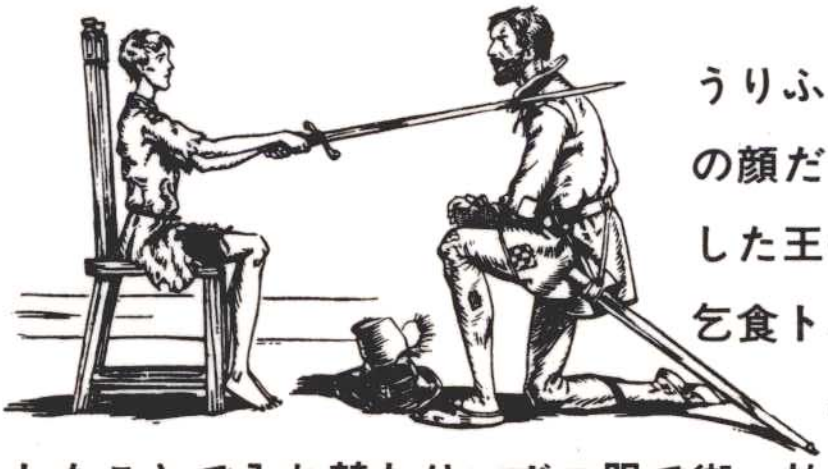
王子と乞食

マーク・トウェーン作

村岡花子訳



うりふたつの顔だちをした王子と乞食トムが，ふとしたことで入れ替わり，ボロ服で街へ放り出された王子は苛酷な国法に悩む庶民生活の貧しさを身をもって体験する。エリザベス一世時代のイギリスを舞台に，人間は外見さえ同じなら中身が変っても立派に通用するという痛烈な諷刺とユーモアに満ちたマーク・トウェーン(1835－1910)の傑作。

赤311-2
岩波文庫

王子(おうじ)と乞食(こじき)

1934年 7 月 25 日　第 1 刷　発　行
1958年 5 月 26 日　第 24 刷改版発行 ©
1991年 1 月 25 日　第 46 刷　発　行

訳　者　村岡花子(むらおかはなこ)

発行者　安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-3265-4111

定価はカバーに表示してあります　印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan
ISBN 4-00-323112-0

岩波文庫

32-311-2

王子と乞食

マーク・トウェーン作
村岡花子訳

岩波書店

Illustrations by Robert Lawson.

Copyrighted by The John C. Winston Company,
Philadelphia, U. S. A.

目　次

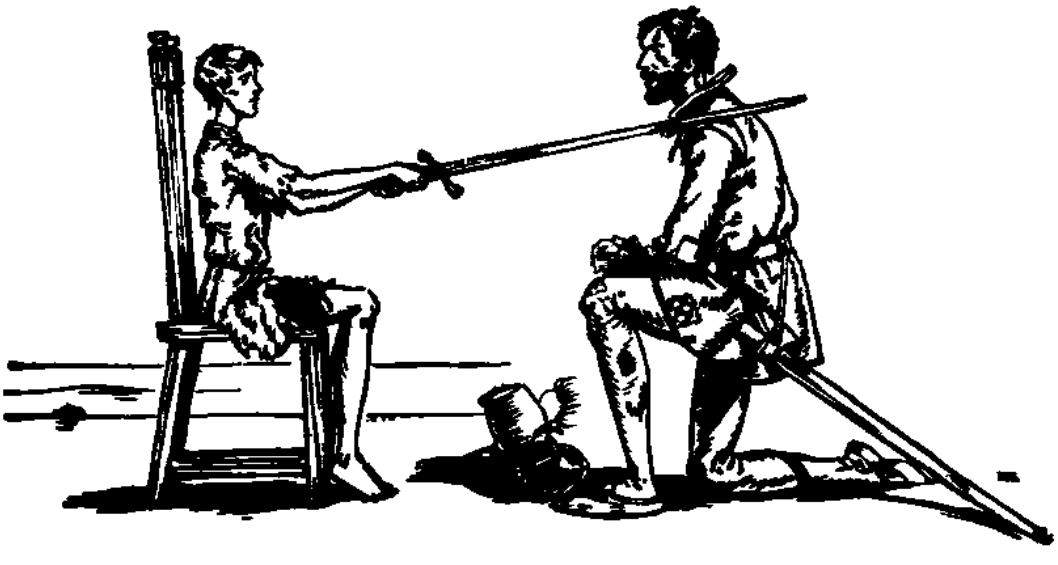
一　王子と乞食の誕生……七
二　トムの成長……八
三　トム、王子に会う……一六
四　王子の苦難……二七
五　宮殿のトム……三三
六　王子の練習……四五
七　食卓のしくじり……五七
八　玉璽のゆくえ……六二
九　テームズ河の盛典……六六
十　橋のたもとで……六九
十一　市会議事堂で……八二
十二　拾った家来……八九
十三　王子の雲がくれ……一〇七
十四　国王ばんざい……一一四
十五　国王トム……一三〇
十六　宴会……一四八
十七　フーフー第一世……一五二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十八　逃げだした国王……一六七
十九　百姓の家……一七八
二十　刃をとぐ怪僧……一八六
二十一　ヘンドン来る……一九六
二十二　わるだくみ……二〇三
二十三　囚われた国王……二〇七
二十四　逃げる国王……二一一
二十五　ヘンドン屋敷（ホール）……二一五
二十六　悲しき旅人……二二七
二十七　獄中の国王……二三三
二十八　苦難……二四六
二十九　ロンドンへ……二五二
三十　トムのその後……二五四
三十一　認証式……二五八
三十二　戴冠式……二六七
三十三　国王エドワード……二八四
三十四　正しき報い……二九六
原注……三〇一
訳者のことば……三〇五

王子と乞食

——あらゆる時代の若い人々のための物語——



慈悲の本質には……二重の恩恵がある。
慈悲は、これを与える者をも受ける者をも幸福にする。
最も力ある人にあっては更に最高の徳である。
慈悲は君主にとって、その王冠にも幾倍してふさわしいものである。

――ベニスの商人より――

一　王子と乞食の誕生

十六世紀もそろそろなかば過ぎようというころのある秋の日、ロンドンに住むカンティという貧乏人の家に、男の子がひとり生れた。それと同じ日に、同じロンドンの市中の、チューードルの宮殿で、待ちに待たれた男の子がうぶ声をあげた。この男の子は、チューードルの一家一族はもちろんのこと、イギリス全土の国民、イギリス人というイギリス人が待ちこがれ、この子に希望をかけ、この子のために朝晩いのり続けたのだから、いま、いよいよ生れたという知らせを聞いて、国中の熱狂はちょう点にのぼった。特別にしたしい交際をしていない者たちまで、だきついたり、キッスしたり、うれし涙を流しあった。だれもかれもみんな仕事を休み、思うぞんぶんのご馳走を食べ、その上に、おどるやら歌うやらのお祭気分がいく日もいく日も続いた。露台にも門口にも、にぎやかに国旗がひるがえり、その中を、はなばなしい行列がねり歩く、昼間のロンドン市中は、なんというすばらしい光景であっただろう。夜は夜で、ほうぼうの辻々に赤く燃えあがるかがり火と、それをとりかこんでおどり狂うよっぱらいたちのむれで、昼間にまけぬにぎやかさだった。

イギリス国中、どこへいっても、うわさはこの子供のことばかり、人びとの話はこのエドワード・チューードル、つまり、自分をいわってくれるこのにぎやかさも、朝ばん自分をお守りしているのが、貴族や貴婦人であることもしらず、（知ったところで、たいしてありがたいとも感じないだ

ろうが）絹やしゅす地の着物をきせられ、なにもわからず生きている皇太子のことばかりだった。

それにくらべ、片いっぽうの、ぼろにつつまれたトム・カンティのことは、この子が生れて、喜びどころか、たいへんな迷惑を感じた親兄弟のものたちが、ぶつぶつぐちを云ったほかには、だれひとりトムのトの字も口にする者はなかった。

二　トムの成長

話は、なん年間かを一足とびに飛びこそう。

そのころ、すでに千五百年の歴史をもっていたロンドンの町は、その時分としては、かなり大きな都会だった。人口も十万ぐらいはあったかもしれない――その倍ほどもあったという人さえある。街路はひじょうにせまく、まがりくねっていて、きたなかったが、中でも、トム・カンティの住んでいた町に近いロンドン橋のあたりはことにひどいものだった。家は木造で、二階が一階より出ばり、三階がまたそれよりもつきでている建てかたで、高くなればなるほど、前につきでる幅は広くなっている。外がわは赤、青、黒と住む人の好きずきで、色々のペンキがぬってあったので、なかなか美しいものだった。

ひし形のガラスが入れてある小さな窓は、みんな外へ開くようになっている。

トムの父親が住んでいた家は、プディング横町をでたところの、オーファル小路という、むさくるしい、せまい路地の中にあった。土台からくさって、たおれかかっているその小さな建物の中は、目もあてられないほど、貧乏な人たちがいく家族も間がりをしていて、身動きもならない

ようにこんざつしていた。

カンティの一家は三階の一へやを占領していた。父と母はすみのほうに、ともかくも寝台のようなものをもっていたが、トムとトムの祖母とふたりの姉のベットとナンの四人は、そんな気のきいたものは持っていないので、板の間じゅうがねどこで、どこへころがろうとかってだった。

ぼろぼろの毛布が一、二枚と、くさったような麦わらをまるめたのがいくつかあったが、まさかこんなものを寝台とはよべなかった。

夜が明けると、四人はこのきたならしい古毛布と麦わらのくずをいっしょにまるめこみ、日が暮れるとその中から、めいめいが自分たちの寝るのにひつようなだけを引きだしてきてもぐりこむのだった。

ベットとナンはふたごで、年は十五だったが、ふたりともお人よしのぶしょう者で、いつもぼろをさげており、まったく、なんにも知らなかった。母親はむすめたちにそっくりのお人よしだったが、父親と祖母はそろいもそろった悪党で、酒を飲むと、めちゃくちゃによっぱらい、ふたりでつかみあいをはじめるか、そうでなければだれでもその辺にいあわせた人にけんかを吹きかけるという、しまつにおえない人たちで、よっている時でも、まじめな時でも、悪口をいいつづけだった。

ジョン・カンティはどろぼうで、その母親は乞食だったから、子供たちが乞食にそだてあげられたことはふしぎではなかったが、どろぼうにすることだけはさすがふたりがかりでもできなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この建物の中に住んでいたみじめな者たちの群の中に、めずらしく、ひとりの年とった神父がいた。

この人は、国王のきげんを悪くして、役目も住居もとりあげられ、いまはすこしの恩給で命をつないでいたが、この人がいつも、子供たちを集めては、親たちにはないしょで人間のふみ行う正道を教えていた。この神父アンドリュウは、トムやふたりの姉に読み書きのほかに、すこしだったがラテン語まで教えたが、姉たちはそんな妙な学問をして友だちに笑われるのではなかろうかと思い、それが恐ろしさにとうとう習わずにしまった。

オーファル小路は、どこへいって見ても、カンティの家族と同じような者たちでいっぱいだった。よっぱらい騒ぎやけんかが、毎晩夜どおしきまって起り、頭を割られたというような話は、ひもじいことと同じくらいにしか、考えられなかった。とはいうものの、トムはその中で、それほど自分を不仕合と考え、それを悲しんだりはしなかった。ずいぶんみじめな思いをしていたが、それを苦しいとは考えなかったのだ。

オーファル小路の子供たちは、みんなトムと同じような身の上だったから、トムは、それがあたりまえで、愉快だと思っていた。夜、一文ももらわずから手で帰ると、まず父親にさんざん小言をいわれ、むちでうたれ、その次に、恐ろしい祖母からまたもう一度、小言とむちを、父親よりもなおはげしくあびせかけられなければならないことも、よく知っていた。そして、夜がふけてから、母親が自分の空腹をがまんして、トムのために残しておいた小さなパンきれを、こそこそと持ってきてくれることも、そして、それをたびたび父親に見つけられてひどくうたれること

RL

も、すべてトムには予定のできごとだった。

それにもかかわらず、トムの生活はかなり楽しくすぎていった。ことに夏は楽しかった。乞食狩りがきびしく、刑ばつも重かったので、トムはどうにか親たちからしおきをされないですむだけを、もらい歩いてしまうと、あとの時間は神父アンドリュウのおもしろい昔ばなし、大男や妖精や一寸法師や仙人や、または魔法の城だのりっぱな王子たちの物語だのを聞いてすごした。トムの頭の中は、だんだんこれらのふしぎな話でいっぱいになってきて、夜ふけの暗やみの中で、悪臭のぷんぷんするすこしばかりのわらの上に、つかれきってふしぶしの痛む身体を横にしながらも、空想のつばさを自由自在にかけめぐらせ、ご殿の中の王子様をえがきだしたりして、いつの間にか身内の痛みや苦しさを忘れてしまうのだった。が、ついには、昼も夜も、ひとつの願いがトムの心からはなれなくなってしまった。

それは、生きた本物の王子を見たいという願いだった。ある時、この望みをオーファル小路の仲間の者たちにうちあけたところが、さんざんにばかにして、まるで取りあってくれないので、それから後、トムは自分の夢を自分の胸だけにこっそりしまっておくことにした。

トムは、神父アンドリュウの古い本を引きだしてはそれを読みふけり、その説明をしてもらった。そうこうしている間に、空想と読書のために、トムという人間がすっかり変ってきた。自分の空想上の人物がみなりっぱな人たちばかりだったので、トムは、だんだんにみすぼらしい着物やあかじみた身体を恥じるようになり、どうにかして、もうすこしさっぱりしたみなりがしたいと思うようになってきたのだった。しかし、実際はあい変らず、泥いじりをして、おもしろがっ

ていたが、前のように、テームズ河に入って、バチャバチャやりながらも、もとは、ただおもしろずくだけでやっていたのが、いまではあかじみた着物と身体をきれいにしようという、べつの目的を持つようになっていた。

チープサイドの五月柱（メイ・ポール）の近くから、市場のあたりにかけては、いつでもなにかしら見る物がたえなかったが、時々、名のしれた貴族が、陸からや、または船で、ロンドン塔へつれてゆかれるような時には、トムもほかのロンドン市民の中にまじって、その不幸な囚人につきそってゆく兵隊の行列を見物した。

ある夏の日のこと、かれはあわれなアン・アスキュウと、三人の男がスミスフィールドで火あぶりの刑にあわされるのを見物しながら、年とった教会の監督が、死んでゆく四人の人たちにむかって、気のぬけたような説教をするのを聞いたこともあった。まずまずトムはかなり変化のある、おもしろい月日を送っていたのだった。

こうして、読書と空想のえいきょうがトムの上に、日一日とはげしくなってきて、ついにはしらずしらずの間に、貴公子をまねるまでになってしまった。

友だちは、トムの身ぶりや、話しかたが、奇妙に礼儀ただしくなり、上品になってきたのを、呆れたり、おもしろがったりしたが、とにかく、トムの勢力はかれらの間に、日ましに大きくなっていったので、仲間の者たちは、おどろいて目を見はりながら、かれを自分たちより一段うえの人間として見上げるようになってきた。トムは、たいそう物知りらしく見え、言うこともすることも、みなふつうの人とちがい、いかにも考えぶかく、ちえ者だった。

トムのしたこと、言ったことは、いちいち子供の口から、大人の間に伝わっていったので、やがて大人たちもさかんにトムのうわさをするようになり、かれを特別に神さまから才能をさずかった、ずぬけてえらい人物として、年をとった人たちが訪ねてきては、色々と相談をするようになり、トムの分別のいいのに舌をまいて帰ってゆくのだった。こうして、いつの間にか、トムはその辺で一番の人気者になってしまった、――ただし、これは自分の家だけはべつにしての話で、一家の者たちの目にはなにひとつ、トムの変ったところは見えなかったので、すこしも感心などしていなかった。

すこしたつとトムはないしょで、「宮廷ごっこ」をはじめた。自分が王子で、仲よしの友だちが近衛兵だの、侍従だの、あるいはそばづきの貴族や女官や貴婦人になり、皇族にもなった。そして、毎日このにせ王子は物語り本からとってきた、大がかりな礼式でもてなされた。毎日、にせ王国のたいせつな事件が宮廷会議で論じあわれ、にせ王子は、空想でつくった陸軍だの、海軍だのにむかって、さかんに命令をだした。

宮廷ごっこがすむと、ぼろ着物を着て乞食かせぎにでてゆき、銅銭五、六枚もらうと帰ってきて、情ないほどぽっちりのパンの切れはしを食べ、おきまりのげんこと小言をちょうだいし、ひとにぎりあるかないかの臭い麦くずの上に身体をのばし、さてまた、はかない王国の夢を見続けるのだった。

ただの一度でもいい、ほんとの王子を見たいという願いは、一日一日、一週一週と、トムの心のなかにさかんになって、ついにはそのなかのいろいろの願いは、ぜんぶこのひとつの願いの中

にのみこまれてしまって、一生の望みはただこれだけというほどになってしまった。

一月のある日のこと、いつものように乞食にでたトムは、しずみがちな心で、あてどなくぶらりぶらりと、ミンシングレンだの、リッツル・イーストチープだのを、寒さにこごえたす足で、三時間も四時間もさまよい歩いた。料理屋の窓さきには、豚肉パイだのそのほか色々の、すばらしいりっぱなご馳走がならんでいて、トムの食慾をそそりたてた。それらのものは匂いをかぐよりほかには、ひと口だって食べたことのないトムだったが、匂いから察しただけでも、天の使いでもなければ、あんなご馳走は食べられないだろうと思っていた。

つめたい雨が降りだして、空は暗くなり、心ぼそいさびしい日だった。

夜になり、トムがびしょびしょにぬれて、空腹をかかえ、とぼとぼと帰ってきたようすを見た時には、さすがに、父親も祖母もかわいそうに思ったと見え、かれらなりのあらわしかたで同情をしめした——というのは、すぐさま、手早くむちうって、寝床へ追っぱらったのである。

ながい間、トムは痛みと空腹と、建物の中のどこかの、つかみあいの声や悪口のために、寝つかれなかったが、やがて思いは遠く空想の国に飛んでいった。

トムは、美しい大きな宮殿の中で、多くの従者にかこまれて、金銀宝石をちりばめた衣しょうをつけている王子たちと、いっしょに眠りの中にとけこんでゆき、いつものように、自分がほんとうの王子になった夢を見たのだった。

ひと晩じゅう、王宮の栄華がトムの上に照りかがやいた。光と香気と音楽につつまれて、貴族や貴婦人の間を動きまわり、自分のために道を開いて敬礼する、美しい着物を着た人びとにむか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com